

原 著

臼歯部修復物の生存期間に関連する要因

青山 貴則 相田 潤 竹原 順次 森田 学

概要：一般歯科医院において、修復物の生存期間とそれに関連する要因を検討することを目的とした。札幌市内の歯科医院にて、1991年1月1日から2005年3月31日の間に修復物を用いた治療を受け、その後、定期健診やその他の治療目的などで再来院した患者を対象とした。コンポジットレジン、メタルインレー、4/5冠、メタルクラウン、メタルブリッジの生存期間とそれに関連する因子をKaplan-Meier法と、Cox比例ハザードモデルを用いて検討した。総計95人、649歯の修復物について分析した結果、平均生存期間では、メタルインレーが3,804日と最も長く、次いでコンポジットレジン3,532日、4/5冠3,332日、メタルクラウン3,276日、メタルブリッジ2,557日であった。10年の生存率を推定した結果、メタルインレー67.5%、4/5冠60.5%、コンポジットレジン60.4%、メタルクラウン55.8%、メタルブリッジ31.9%であった。再治療の原因では二次う蝕によるものが多く、特にコンポジットレジン(78.2%)、メタルインレー(72.4%)で著明であった。Cox比例ハザードモデルを用いて、修復物の生存期間の長さに影響している因子を検討した結果、アイヒナー分類で生存期間と有意な関連($p < 0.05$)がみられ、アイヒナー分類B1、B2、B3が予後不良であり、ハザード比はそれぞれ1.88 (1.16-3.05)、3.18 (1.93-5.25)、2.44 (1.31-4.53)であった。年齢、歯種、治療時の歯髄状態と生存期間との間に有意な関連は認められなかった。

以上の結果から、メタルブリッジの生存期間が最も短く、また咬合の要因が生存期間と関連していることが示唆された。

索引用語：生存期間、修復物、咬合、二次う蝕